



「漂う民」連載を終えて

東欧・ソ連の変革、冷戦の終結など、世界が激動したこの一年間、国際面で「漂う民」を連載した。国際社会の構図の変化は、端的に言えばゴルバチョフ路線がひき起こしたものであろうが、視点を市民のレベルに置くと、昨年十一月九日の「ベルリンの壁」の崩壊に象徴されるように、人々が「壁」を突き破っていることがよく分かる。普通の市民が旅行する自由、豊かに



中島健一郎 (外信部)

なる自由、国を遊ぶ自由、そして体制を選ぶ自由を求め、古い枠組みを壊す原動力となったのだ。一方、アジア諸国をはじめ途上国の人々は金満ニッポンを目指し、労働開国を迫っている。だが、日本政府は流入圧力にうろたえ、および腰だ。このままでは金もうけ主義の「異質な国」という評価が定着しかねない。きちんとした受け入れシステムをつくる時期だと思ふ。

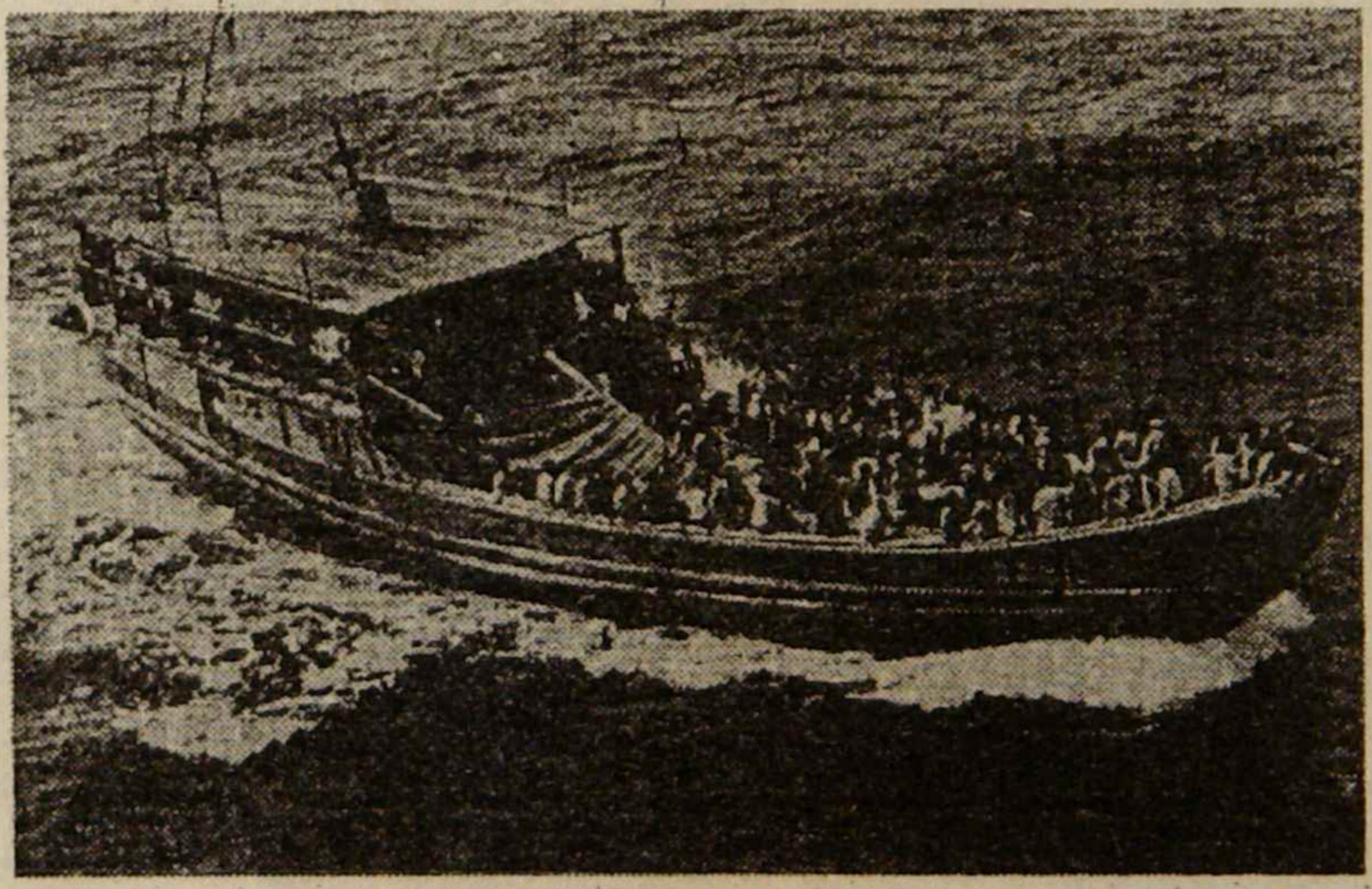
リビンの約三十七倍、韓国の五・八倍の水準だ。「日本に行けば月給が三十倍になる」という情報が、中国人を日本へと駆り立てた。出稼ぎのうねりは豊かな日本を映し出す一方、「それほどまでして日本に来るのか」と日本人を驚かせた。

だが残念なことに日本国内では「第二の黒船来航」のような騒ぎ方だった。正直いって私にも、人々が国境を越えて動き出すことが国家の在り様を揺さぶることにつながるという認識はなかった。ただ日本が黄金の国シバングと外国人に思われていることを実感したくらいだった。

ところが「漂う民」シリーズの担当デスクを続けていると、過去とは比べものにならない規模とスピードで世界中の民衆が国境を越えて動き始めていることが分かった。その大きな原因の一つは情報化の進行だろう。世界の隅々まで情報は驚くほどの早さで伝わっていく時代だ。運賃も安くなったし、航空機の発達で地球の裏側から日本に来るのもそんなに大変ではない。東欧の民主化も、国境を簡単に越えた電波やモノの情報が起

自由求める「市民パワー」受け入れシステム整備を

も六百ともいわれる。共産で、々が自由に行き来できなくなるケースもあれば、きしみを生じている場合もある。国境を越えた人々を待っているのは、必ずしもバラ色の生活ばかりではない。しかし世界の潮流は、欧州が従来の国家の枠組みを超えて地域としての一体化をつくりあげつつあるような方向に向かっているのではなからうか。欧州は九二年の市場統合をアゴに、国境での出入国審査



米国のような声高な国は、経済摩擦もあって「もっと経済規模にあった責任を果たせ」と迫ってくる。だが、日本にやってきた途上国の人々は大半、「不法就労」をひげ目に感じおとなしく働かだす。本来、祖国の発展に役立つべき労働力を日本が金の力でツマミ食いしているという見方もできるのだ。「きつい、きかない、危険、かっこが悪い、給料が安い、休日が少ない」という「6K労働」を、日本人は外国人労働者にやってもらっている面があるのに、あまり感謝して

社会的コスト 払ってでも... ところが、トルコ人の定住問題に苦勞している西独のケースなどを引き合いに、「労働開国」を主張する人もいる。だが、奇跡といわれた西独の経済繁栄は、外国人労働者の存在なしには考えられなかったのだ。西独では外国人労働者の割合が六、七%を超えてから社会問題化したといわれる。と... 昨年8月29日、中国人、ベトナム人ら二百四人を乗せて佐世保港に入った難民船 (長崎沖で撮影)

「労働開国」日本の急務

現代世界を特徴づける地球規模の現象といえる。もちろん「漂う民」現象には明暗がある。宗教、言語、生活様式などによって区分される「民族」の数は、三百と

と否定的側面ばかり見えてきた。だが「漂う民」の連載が終つてみると、経済大国日本はもっとヒトの面でも国際的責任を果たすべきだと思ひ始めた。世界中から資源を輸入し、製品を輸出し、潤っている日本。途上国の人々がさまざまな自由を追求し始めた今、その手助けを積極的にや

このページへの意見は毎日新聞社「記者の目デスク」(東京都千代田区一ツ橋一の一の二、または大阪市北区堂島一の六の二〇)までお寄せください。

記者の目

情報化の進行が起爆剤に 「漂う民」の企画のきっかけは昨年夏の中国からのポトプトルだった。ベトナム難民に偽装した中国人は、台風が襲う東シナ海に小船で挑み、日本列島に次々と漂着した。日本の国民一人当たりのGNP(国民総生産)は八八年で中国の七十倍以上、フィ

情報化の進行が起爆剤に

国家の枠組み 越える方向へ

「漂う民」の企画のきっかけは昨年夏の中国からのポトプトルだった。ベトナム難民に偽装した中国人は、台風が襲う東シナ海に小船で挑み、日本列島に次々と漂着した。日本の国民一人当たりのGNP(国民総生産)は八八年で中国の七十倍以上、フィ